様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：２８００３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３２００５６

研究課題名（和文）交錯するまなざし――琉球・沖縄をめぐる欧米のトラベルライティングの総合的研究

研究課題名（英文）Gazing the Other: A Comprehensive Study of European and American Travel Writing on Ryukyu and Okinawa

研究代表者
山里　勝己（Yamazato, Katsunori）

名桜大学・国際学部・教授

研究者番号：８０１０１４５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代初頭の琉球・沖縄をめぐる欧米のトラベルライティングを広範に検証した。合衆国探検遠征隊の研究を通し、ペリー提督の対琉球・日本外交を、太平洋諸島における米国の国家戦略上に位置づける可能性が拓かれた。また、琉球と日本においてカトリック教の再布教を担ったフランス人宣教師たちの足跡に、史料紹介や翻訳等を通し光を当てた。さらに、クリフォードとマクスウェルの残した二つの新資料の紹介を行い、沖縄近代史の画期・一八一六年の英艦隊来琉の実像を浮き彫りにした。薩摩の支配による琉球海域秩序の変化の考察は、西洋との言語的接触が不可能となった状況についての今後の研究に、貴重な材料を提供している。

研究成果の概要（英文）：This research focused on early modern Western travel writings about the Ryukyu Kingdom and Okinawa. By examining records related to the US Exploring Expedition, we were able to better understand the rationale behind Commodore Perry's visit to Ryukyu and Japan, and more generally the US national strategy towards the Pacific islands. We also introduced and translated historical materials that shed light on the footsteps of the French missionaries who were working to bring Catholicism back to Ryukyu and Japan. Moreover, our research has led us to the hitherto overlooked writings of Clifford and Maxwell which together throw the epoch-making 1816 British visit to the Kingdom of Ryukyu into concrete relief. Finally, our work on the altered maritime defense policy of the kingdom following the invasion of Satsuma will provide some important clues as we continue to investigate why there was almost no linguistic contact between the kingdom and the West through the end of its existence.

研究分野：人文学

キーワード：欧米のトラベルライティング　琉球　沖縄　異文化接触　コンタクトゾーン　ポストコロニアリズム　表象論　反表象論

１．研究開始当初の背景

日本をめぐる欧米のトラベルライティングの研究には十分な蓄積があるが、琉球・沖縄に関しては大幅に遅れた状態にあり、こうした欠落を埋めることなしには、日本と欧米に関する自己像と他者像（表象と反表象）の全体像の把握は望めず、文化接触や社会変容のプロセスを明確に理解することも不可能である。

いっぽう、欧米人と琉球（沖縄）人の接触に関する史料の編纂及び翻刻は、かなりの充実ぶりを見せていた。『琉球王国評定所文書』（全 19 巻）の編纂はもちろん、たとえば本研究の協力者の一人ベイヴェール氏による *Ryūkyū Studies to 1854: Western Encounter Part 1*（全 5 巻）と *Ryūkyū Studies since 1854: Western Encounter Part 2*（全 5 巻）、さらにもう一人の研究協力者Ａ・Ｐ・ジェンキンズ氏による *The Journal and Official Correspondene of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part I (1845-51)* と *Part II (1852-54)* の出版により、琉球・沖縄をめぐるトラベルライティングの基礎的かつ総合的な分析を行う機は熟していた。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀から 20 世紀前半までに琉球・沖縄に来航または滞在した、英米を中心とする欧米の旅行者たちの残した文書及び記録（トラベルライティング）を総合的に検証することを目的とする。

以上のような記録は来航者のまなざしで書かれたものであるが、同時に〈来航された者〉、すなわち琉球・沖縄側の記録もまた、存在する。『球陽』や『評定書文書』など、欧米のトラベルライティングと比較検討しつつ分析することで、表象と反表象のダイナミズムのありようを深く示唆することが可能であり、文化接触の様相、相互表象の実相を具体的に研究するには絶好の史料・資料となっている。

これらを基に、既存の欧米の日本（人）論、その生成のプロセス、欧米の日本表象のありように関して、琉球・沖縄をめぐるトラベルライティングという視座を設定することにより、より包括的かつ複雑なプロブレマティクスとして深化することができるはずである。

本研究では、理論的には表象論を基礎として双方向（来航する者／来航される者）の表象のありようを検討し、ポストコロニアリズムの文化接触界域論（コンタクトゾーン／Contact Zone）を踏まえながら、接触と表象の具体的な様相を検証する。琉球・沖縄は、例えばペリー提督がそうであったように、日本との接触に先んじて欧米との接触を経験した場所であり、これまでの研究で欠落していた部分を分析することで、既存の欧米の日本論の生成プロセスの検討とその再評価を行う。

３．研究の方法

画像を含む一次資料、関連する二次資料の調査及び蒐集を行うため、欧米の公文書館、国公立図書館、軍関連施設、記念館等で、印刷刊行された資料のみならず、手稿のまま残っている資料の発掘及び複写等を行なった。

3 年間で計 3 回の合同ワークショップ／研究報告会を開催したほか、小ミーティング等を通して、調査・研究の進捗と成果についての研究者同士の相互確認と意見交換を図った。

第 1 回は、2013 年 11 月 30 日、名桜大学（沖縄県名護市）で合同ワークショップ／研究報告会を行い、2 人のゲストスピーカーをお招きした。フランク・スチュアート氏（ハワイ大学、教授）には “Captain Cook on Polynesia” と題し、Ａ・Ｐ・ジェンキンズ氏（沖縄県立芸術大学、教授）には “Bernard Bettelheim: a Representative of Britain in Mid-19th-Century Okinawa” と題し、講話を行っていただいた。

第 2 回目は、2014 年 9 月 6 日、琉球大学（沖縄県西原町）で合同ワークショップ／研究報告会を行った。

第 3 回は、2015 年 1 月 31 日、北部生涯学習推進センター（沖縄県名護市、名桜大学内）で合同ワークショップ／研究報告会を行い、ゲストスピーカーに、パトリック・ベイヴェール氏（フランス国立社会科学高等研究院、名誉教授）をお招きし、“Basil Hall, Peter Stephen Du Ponceau, and the Ryūkyūan Language” と題する講話を聴かせていただいた。

４．研究成果

（1）アメリカ

平成 24 から平成 26 年にかけて、ハーバード大学図書館、ワシントン DC 及びその近郊地域の調査施設（The Navy Department Library、資料館（the National Museum of Natural History）、公文書館（NARA: National Archives and Records Administration）を訪問し資料調査と収集を行った。調査対象は、アメリカ合衆国探検遠征隊 (United States Exploring Expedition)を率いたチャールズ・ウィルクス（Charles Wilkes）、日本との関連でしばしば研究対象になるマシュー・Ｃ・ペリー（Matthew Calbraith Perry）および、アメリカ合衆国の太平洋探査関連料、であった。

マシュー・Ｃ・ペリーとの関わりにおいて述べられることの多いアメリカ合衆国と太平洋諸島との文化交流史の枠組みを再検討する為に、アメリカ合衆国が最初に組織した国家的探査航海であるアメリカ合衆国探検遠征隊の記録（以下 Wilkes 探検記、あるいは、Wilkes 探検）の意義を調査した。捕鯨基地確保と太平洋地域における通商発展させるという国家プロジェクトを基盤として Wilkes 探検ではそれまでで最大規模の探検隊を組織し、太平洋地域における人類学的、地理的、

生物学的、植物学的、天文学的、海洋学的調査を行った。6 隻編成で、総勢 346 人の船員を動員し、その中には 9 人の科学者と数人の画家も含まれていた。特にクック以来その存在のみしか知られていなかったフィジー諸島の詳細な探査記録、南極大陸の発見は世界的にも顕著な功績として知られており、その他の太平洋地域のおよそ 260 に及ぶ島々を巡り集積した膨大な記録も、その後の合衆国の学術的・文化的発展において大きな役割を果たすことになった。例えば、アメリカ合衆国植物庭園（U.S. Botanic Garden）、合衆国水路協会（U.S. Hydrographic Office）合衆国海軍天文台（Naval Observatory）、スミソニアン博物館の資料は Wilkes 探査の収集資料が基盤となっており、第二次世界大戦時の戦略立案の際にその記録が利用されたことも知られている。因みに Wilkes 探検当初の計画では日本を訪れることになっていたが、航海中の様々な要因が重なり、計画変更となった。以上のことを踏まえると、ペリー来航によって語られることの多い日米関係史は、Wilkes 探検を考慮に入れることにより、19 世紀後半以降に顕在化していくアメリカ合衆国の太平洋地域における軍事的・政治的介入の歴史を考える可能性を拓くことにもつながると言えよう。収集した資料分析を引き続き進めながら今後具体的成果を発表する予定である。

（2）フランス

フランス側資料に関しては、おもにこれまでに確認・公刊された文献等を精査・分析する一方、フランスにおいて新資料の発見を試みた。本科研開始当時、すでに多くのフランス語資料が公になっていたが、英語による文献に比べると日本語で紹介されているものが少ないことから、今後の諸分野の琉球・沖縄研究者との情報共有のためにも、できるだけ文献の和訳を通して紹介しながら分析を進めた。

琉球との交易交渉の目的で初めてフランス艦船が来航した 1844 年以降、20 世紀初頭までの記録に関して、フランス人の琉球・沖縄へのまなざしについては以下のような点が言えるだろう。

1840 年代当時、鎖国を続ける日本への足掛かりとして琉球を戦略的な場所とみていたフランス人は、琉球に関する情報源としてすでにイギリス人バジル・ホール（1816 年来琉）や、フレデリック・ビーチー（1827 年来琉）らによる航海記を読んでおり、ある程度、琉球やその住民に対するステレオタイプを持って接触を図ったと言える。一般住民については「誠実」で「人懐っこい」等の予断もあったようであるが、実際に琉球人を目の当たりにしたフランス人たちは、予想以上の好印象を受け感動することはあっても、失望することはなかったことが資料からうかがえる。

宣教師側からは、従順な琉球人たちは「良きキリスト教徒」になる資質を持つと判断され、彼らの報告書からは布教が禁止されていただけに歯がゆい思いを募らせる様子が読み取れる。布教への焦りから、なかには武力による開国を願う者さえいたことも認められる。

いっぽう、海軍関係者はそれまでの情報を通して、琉球が中国と薩摩に対し二重の従属関係にあると知りつつ接触を図り、さらに実際の交渉では、相手が臨時役職の人物（仮称による）でしかないという場面にも出会う。これにより 1860 年代頃以降は「琉球の役人は二枚舌である」ということはクリシェにまでなっている。それでも軍人たちは概して冷静を保ち、一国家を相手として対等に扱っていることが資料から読み取れる。それほど、東アジア地域の交易の中継基地、そして日本への布石として琉球を戦略的に有益な地域とみなしていたということであろう。

しかし日本による「琉球併合」後はフランス側の記述にも変化がみられる。日本開国後、フランス艦船の寄港数の減少や宣教師の日本本土への移住からも、沖縄が戦略的重要性を失ったことは明白だが、フランス人の残した記録には、1870 年代からすでに首里城周辺についてはノスタルジックな記述が見られるほか、二重支配下にあったとはいえ一王国として体をなしていた琉球の住民たちに認められた誇りと余裕は影をひそめ、日本政府による「被支配」の構造と、それに抗う住民の姿が浮き彫りになってくる。

資料収集に関しては、おもにリヨンの宣教事業団の古文書室に保管されている資料について調査した。琉球に直接関係する新資料はほとんどなかったが、琉球に滞在した宣教師たちのその後の足取りを明らかにする手紙や、日本各地の布教状況に関する宣教師の手紙・報告書・請願書や写真など、日本におけるカトリック教再布教の様子をうかがい知る興味深い資料を数多く確認することができた。

（3）イギリス

史料蒐集の面で、二つの大きな成果があった。以下にあげる通り、H・J・クリフォードによる訪琉日記、さらにマレー・マクスウェル艦長による航海記の存在を確認できたことである。クリフォードの日記については、2015 年 3 月 30 日付『沖縄タイムス』紙 1 面で大きく報じられた。

- *Continuation of Private Memorandums made during a Voyage to China in H. M. Sloop* Lyra *in Company with H. M. Ship* Alceste *after landing His Exellency the Right Honorable Lord Amherst the British Ambassador to the Court of Pekin, Containing Memorandums Made at the Island of the Great Lieuchew or Loochoo in the Japan Sea.*

- *A Narrative of Occurrences and Remarks Made on Board His Majesty's Late Ship* Alceste *by Captain Murray Maxwell C. B.*

When Employed in Conducting the Embassy to and from China in the Years 1816 and 1817.

以上は、いずれも英国のポーツマスにある、国立英国海軍博物館（National Museum of the Royal Navy）の付属図書館に保管されている稿本である。

クリフォードは友人バジル・ホールが艦長をつとめる英艦ライラ号に乗船しており、マクスウェル艦長は旗艦船アルセスト号で総指揮をとっていた。両者とも、1816 年 9 月 15 日頃から 10 月 27 日まで琉球を訪問した。

これら新史料を琉球側の記録と比較分析することで、①琉球側は大筋では日本の鎖国政策に従いイギリス人たちを接待しており、②マクスウェル艦長は、『球陽』の記録通り、琉球国王に謁見できなければ軍艦を派遣する旨の「脅し」を行っていたこと、などが明らかになった。

以上の史料の他、当時の新聞や定期刊行物の分析を通して、1816 年の英艦来琉がこれまでバラ色に描かれることが多かったのは、①ホールやクリフォードが外交交渉の「蚊帳の外」に置かれており、②ロマン主義的審美眼を通して琉球を理解・紹介したためであることが明らかになった。

クリフォードは帰国後、海軍琉球伝道会を組織し、ベッテルハイムを派遣する。前述のベッテルハイムの日記（全 2 巻）が事細かに描出する、江戸末期の禁令下の琉球の庶民と宣教師の交流についても、研究発表等を通して紹介につとめた。現在、沖縄県教育庁文化財課史料編集班によってこれら圧巻の和訳が進められており、プロジェクトに参加している本研究分担者もいる。

なお、クリフォードの訪琉日記の邦訳は、今夏、不二出版より上梓予定。さらに、上記 2 史料の原文翻刻も続けて年末から来年初めにかけて不二出版より上梓予定である。

（4）琉球

17 世紀から 19 世紀にかけて琉球国の外交と内政に関する研究を行った。その主な成果としては、琉球国が薩摩藩の支配によってどのような影響を受けたかという視点で琉球の海域秩序の変容などを検討し、19 世紀初頭から後半にかけて琉球国へ来航した欧米船への対処策の前史を研究した。内政面では家族・夫婦・親子をめぐる権力関係のあり方や農政に関する新史料の紹介などによって琉球社会の特質を明らかにする作業を行い、一定の成果をあげた。

（5）言語接触

分担研究の当初の目的は、琉球における西洋人との言語接触により生起した言語状況を分析することであった。琉球においては、通訳を専門とする一部の王府役人――真栄平房昭、安仁屋政輔、板良敷（牧志）朝忠の 3 名がよく知られている――や西洋人の世話をする者を除いては、西洋人と接触することが禁じられていた。これにはもちろん、薩摩の意向もあったが、その結果、顕著な語彙借用、言語シフト、言語衰退、二言語使用等の言語接触の結果生じる言語現象はおこらならなかった。

英国人バジル・ホールが著した航海記によると、英国人との交渉に従事した通事（真栄平房昭）は短期間である程度の英語を習得したとされる。ただ、航海記などによると、真栄平が修得した英語には、“Anya, him mother sick, he go him mother house,” “Tou, three day time, him mother no sick, he come ship” などの表現に見られるように文法的な逸脱がある。

真栄平は英語を漢字（中国語）で表し、カタカナのルビを付した英会話集を編纂し、牧志は『琉英国語』という英語教本を編纂したとされている。その一方で、キリスト教布教のため琉球に長期滞在したベッテルハイムは、琉球の言語を習得し聖書を琉球語に訳するなどしたが、琉球人との接触が禁じられていたため、目的を果たすことなく琉球を離れている。琉球における西洋人との言語接触については、琉球人の言語を変化させるほどのものではなかったのである。

琉球と類似する歴史を有するハワイにおける言語接触について調べることで、両者の相違点が浮き彫りになる。ハワイでは、19 世紀前半にキリスト教布教のためプロテスト系の神父が滞在したことにより、西洋人とハワイ人との接触がおこった。アメリカ人神父はハワイ語に文字を与え、聖書をハワイ語に訳し、ハワイ語による布教や、ハワイ語学校の設立運営に関わった。

ハワイ王国の有力者の子弟は、宣教師が設立した寄宿舎学校でキリスト教、英語、アメリカ文化（西洋式マナー）等を学び、キリスト教の洗礼をうけた。また、19 世紀のハワイでは、砂糖産業やそれに関連する産業はアメリカ資本に独占されていたので、資本家の話す英語の重要性が高まり、英語が優勢言語となり、ハワイ語が劣勢言語となりつつあった。

さらに、西洋人が持ち込んだ病気などが原因となり、ハワイの人口が急激に減少し、砂糖プランテーション等で働く労働者が不足していた。そこで、ハワイ王府は、中国や日本からの移民を受け入れ労働不足を補ったが、アジアを中心とした様々な国々からの移民の流入により、プランテーションでは多言語の接触が起こっていた。その結果、英語をベースとするハワイアンピジン英語が形成された。これらの事象から、19 世紀のハワイにおいては、米国人、ハワイ人、移民の間で言語接触が起こり、言語同化・衰退とピジン英語の形成をもたらしたことがわかる。

上記のように、琉球とハワイでは西洋人との接触状況に差違が見られ、その結果が言語接触の有無として現れたといえる。琉球では、西洋人と接触したのは一部の役人のみで、英語を習得したのも一部である。大半の住民は西洋人と接触することを禁止されたため、言語の接触はほとんどなかった。一方、ハワイ

では、西洋人との接触は制限されなかったどころか、ハワイ王国の有力者の子ども達は1840 年に設立された寄宿舎学校で米国人宣教師夫婦から英語やアメリカ文化などをまなんでいた。

両国において差異をもたらした大きな要因には、統治形態の違いが関係していると考えられる。琉球国は、実質的には薩摩藩に支配されていて、薩摩の意向に反して、琉球の人々が西洋人と頻繁に接触することを認めることはできなかった。いっぽう、ハワイ王国には琉球を支配した薩摩藩のような「お国元」の存在はなく、王国政府が西洋人の接触を認めれば、ハワイの人々は西洋人と接触することができたのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 9 件）

①豊見山和行、「尚家文書「田地廻勤首尾」について――紹介と史料翻刻（その２・完）――」、『琉球アジア文化論集 : 琉球大学法文学部紀要』、査読無し、創刊号、2015、pp. 27-46

②豊見山和行、「「けふり・くちや船・脱体・みけい」考――言葉からみた琉球史――」、『沖縄文化』、査読有り、48（2）号、2014、pp. 223-232

③豊見山和行、「尚家文書「田地廻勤首尾」について――紹介と史料翻刻（抄） ――」、『日本東洋文化論集 : 琉球大学法文学部紀要』、査読無し、20 号、2014、pp. 69-101

④豊見山和行、「琉球国の交易史学習における基礎的史実の再検討――明初の朝貢回数を中心に――」、琉球大学教育学部編『2011-2012 年度「海を活かした教育に関する実践研究」成果報告書』、査読無し、2013、pp. 631-639

⑤豊見山和行、「前近代琉球の災害史について――環境社会史の視座から――」、沖縄防災環境学会編、『論文集「防災と環境」』、査読無し、第１号、2012、pp. 1-4

⑥Patrick Beillevaire, “Présences françaises à Okinawa: de Forcade (1844-1846) à Haguenauer (1930),” *Ebisu. Études japonaises*, 査読有り, vol. 49, 2013, pp. 133-164

（翻訳）

⑦宮里厚子、「フォルカード神父の到着から 50 年後の琉球諸島――アルブ神父の報告書――」、『国際琉球沖縄論集』、査読無し、第 4 号、2015、pp. 109-116

⑧宮里厚子、「ルイ・テオドール・フューレの手紙――フランス人宣教師の見た 1850 年代の琉球――」、『国際琉球沖縄論集』、査読無し、第 3 号、2014、pp. 67-78

（エッセイ・研究紹介）

⑨宮里厚子、「十九世紀におけるフランスと琉球の関係」、石原昌英編、『琉球大学ブックレット 3　沖縄からの眼差し、沖縄への眼差し』、査読無し、沖縄タイムス社、2015、pp. 37-44

〔学会発表〕（計 6 件）

①浜川仁、「クリフォードの『訪琉日記』とベイジル・ホールの琉球」、沖縄ロマン派文学研究会、2015 年 4 月 25 日、ホテルロイヤルオリオン（沖縄県那覇市）

②山里勝己、「（招待講演）ゲーリー・スナイダーの環境思想――日本との関連で」、第 4 回環境思想シンポジウム、2014 年 3 月 18 日、安藤百福記念　自然体験活動指導者養成センター（長野県小諸市）

③ Masahide Ishihara, “Endangerment of the indigenous languages in Okinawa Prefecture, Japan,” Foundations for Endangered Languages XVIII Okinawa, September 18th, 2014, Okinawa Convention Center (Ginowan, Okinawa)

④ Masahide Ishihara, “Revitalization of the indigenous languages of the Ryukyus,” College of Hawaiian Language, November 3rd, 2014, University of Hawaii at Hilo.

⑤浜川仁、「琉球の煌き――英国における表象（1810-1830）――」、沖縄ロマン派文学研究会、2013 年 4 月 28 日、ホテルロイヤルオリオン（沖縄県那覇市）

⑥浜川仁、「ある王国をめぐるトラベルライティング――ロマン派期イギリスにおける琉球イメージを中心に――」、イギリス・ロマン派文学研究会夏季研究会、2013 年 8 月 21 日、民宿叶館（大分県玖珠郡九重町）

〔図書〕（計 20 件）

①山里勝己、ミネルヴァ書房、「弱さと正義、力と不正義――琉球・沖縄、日本、アメリカをめぐる〈幻想〉試論」、『〈日本幻想〉表象と反表象の比較文化論』、2015、pp. 187-216

②豊見山和行、ボーダーインク、「琉球王府による蘇鉄政策の展開」、『ソテツをみなおす－奄美･沖縄の蘇鉄文化誌－』、2015、pp. 50-65

③ Shin Yamashiro, Palgrave Macmillan, *American Sea Literature: Seascapes, Beach Narratives, and Underwater Explorations*, 2014, 125 p.

④石原昌英、大月書店、「しまくとぅば意識と活動に見られる男女差」、喜納育江編、『沖縄ジェンダー学』、2014、pp. 143-165

⑤ Masahide Ishihara, Cambridge Scholars Publishing, “Language vitality and endangerment in the Ryukyus,” Mark Anderson and Patrick Heinrich eds., *Language Crisis in the Ryukyus*, 2014, pp. 140-168

⑥新永悠人・石原昌英・西岡敏、ココ出版、「北琉球諸語（奄美語・国頭語・沖縄語）の存続力と危機度」、下地理則・パトリック-ハインリヒ編、『琉球諸語の保持を目指して』、2014、pp. 96-142

⑦豊見山和行、大月書店、「前近代琉球の家族・夫婦・親子をめぐる権力関係」、『沖縄ジェンダー学　第１巻「伝統」へのアプローチ』、

2014、pp. 57-80
⑧Patrick Beillevaire, Patricia Plaud-Dilhuit (ed.), Presses universitaires de Rennes, “Un avant-goût de japonisme en Sarthe et en Mayenne: les envois d’objets ryūkyū et japonais par le père Louis Furet (MEP) avant la Restauration de Meiji,” *Territoires du japonisme*, 2014, pp. 27-40.
⑨Frank Stewart (ed.), University of Hawaii Press, *Islands of Imagination, Volume One: Modern Plays from Indonesia. Manoa*, 2014, 240 p.
⑩笹田直人・山里勝己・野田研一、ミネルヴァ書房、『アメリカ文化　55 のキーワード』、2013、248 p.
⑪ゲーリー・スナイダー、山里勝己（編集・翻訳）、野草社、『For the Children――子どもたちのために』、2013、142 p.
⑫ゲーリー・スナイダー・山尾三省、山里勝己（編集・翻訳）、野草社、『聖なる地球のつどいかな』、2013、285 p.
⑬山里勝己・石原昌英（編集）、彩流社、『〈オキナワ〉人の移動、文学、ディアスポラ』、2013、219 p.
⑭Frank Stewart、山里勝己・石原昌英（編集）、彩流社、「『カクテル・パーティー』の上演はなぜ必要であったか」、「大城立裕＆フランク・スチュワート特別対談――『カクテル・パーティー』を語る」、『〈オキナワ〉人の移動、文学、ディアスポラ』、2013、pp. 77-94、pp. 95-118
⑮我部政明・山里勝己・石原昌英（編集）、彩流社、『人の移動、融合、変容の人類史――沖縄の経験と 21 世紀への提言』、2013、415 p.
⑯豊見山和行、吉川弘文館、「島津氏の琉球侵略と琉球海域の変容」、『日本の対外関係 5 地球的世界の成立』、2013、pp. 261-276
⑰A. P. Jenkins, St. Petersburg State University, Faculty of Philology, “William Board, 1854: Arguments for Reopening His Case,” *Nikolai Nevsky: His Life and Legacy: Proceedings*, 2013, pp. 268-279
⑱豊見山和行、「首里王府の宮古統治」、宮古島市教育委員会編、『宮古島市史第 1 巻通史編　みやこの歴史』、2012、pp. 111-125
⑲A. P. Jenkins、沖縄県教育員会、『沖縄県史史料編 22　近世 3　The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54, Part II (1852-54)』、2012、x+732 p.
⑳A. P. Jenkins, Evgeny Steiner (ed.), Russian State Institute of Cultural Studies, “*Timeo Danos et dona ferentes*: Ryukyuan Interaction with the Missionary Bernard Bettelheim,” *Orientalism Occidentalism: Languages of Cultures and Languages of Description*, 2012, pp. 290-306

〔その他〕（計 3 件）
①「1816 年 英国人の訪琉日記 衣服や髪形綿密な水彩画 英の博物館に保管 浜川氏確認」、「クリフォード訪琉記 琉球人と交流克明に」、『沖縄タイムス』（朝刊）、2015 年 3 月 30 日（1 面、29 面）掲載
②浜川仁、「クリフォードの『訪琉日記』・上」、『沖縄タイムス』（朝刊）、2015 年 6 月 2 日（18 面）掲載
③浜川仁、「クリフォードの『訪琉日記』・下」、『沖縄タイムス』（朝刊）、2015 年 6 月 3 日（18 面）掲載

６．研究組織
(1)研究代表者
山里　勝己（YAMAZATO　KATSUNORI）
名桜大学・国際学群・教授
研究者番号：80101450

(2)研究分担者
石原　昌英（ISHIHARA MASAHIDE）
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：70244283

豊見山　和行（TOMIYAMA KAZUYUKI）
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：40211403

宮里　厚子（MIYAZATO ATSUKO）
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：70325827

山城　新（YAMASHIRO SHIN）
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：80363654

浜川　仁（HAMAGAWA HITOSHI）
沖縄キリスト教学院大学・人文学部・教授
研究者番号：70412872

(3)研究協力者
パトリック・ベイヴェール
（Patrick Beillevaire）
フランス国立社会科学高等研究院・日本研究所・名誉教授

A・P・ジェンキンズ（A. P. Jenkins）
沖縄県立芸術大学・名誉教授

フランク・スチュアート（Frank Stewart）
ハワイ大学・マノア校・教授（英文学）